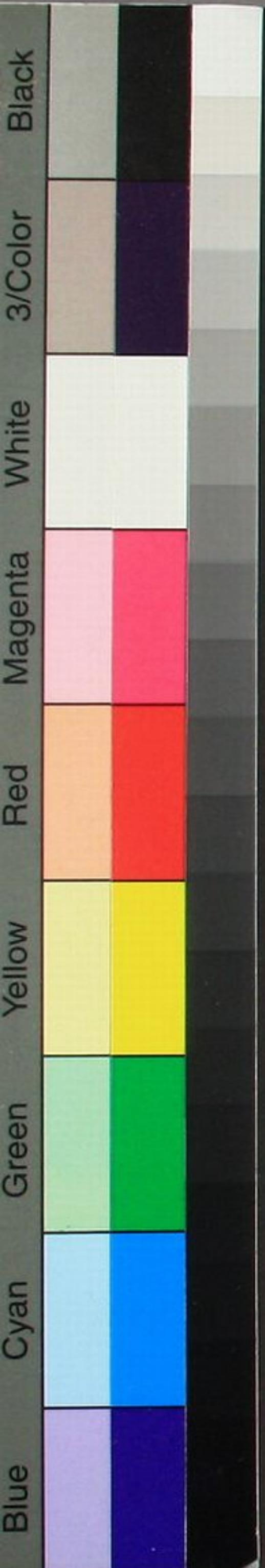
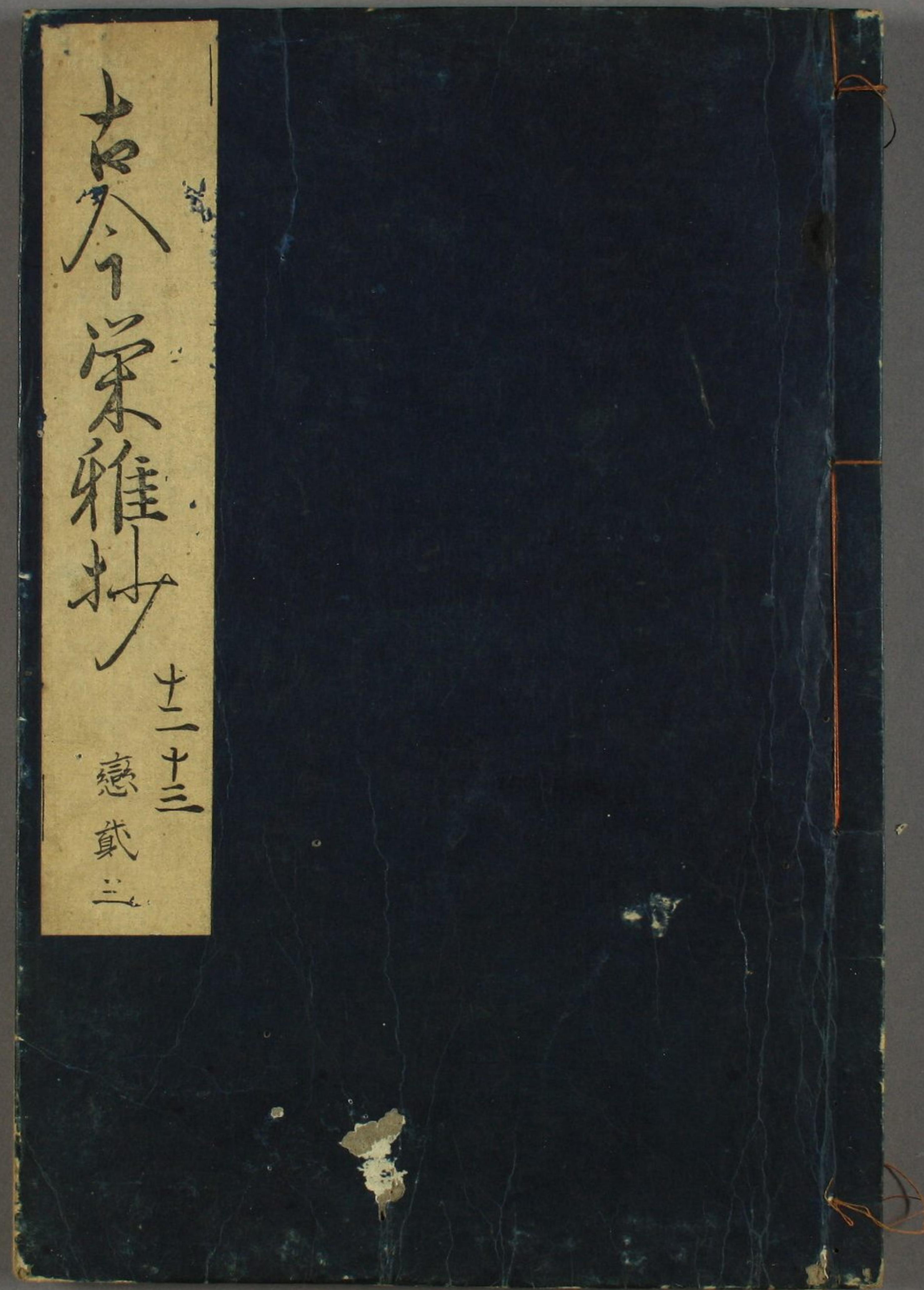


8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

大宋雅書

三十一  
戴憲





古今和琴集卷第十二

亥之二

歌、らと

小野 小町

内閣文庫

おもてねをや人のみうくんをもつりせもさうさほと  
おぐわむひのまもや人のからゆ。まともうたう  
をもあまとまわととぬ縁酒とまくして。さうたい  
ひまやたら

ううふよおきま人をかくしむるをふ物ハ軽とそうて  
うりけ乃れよあひにうへとかんそめて。しりはよくともお  
じよよ。おまくえ物をもむすれのうと。假寝りねとよ  
ひとせておきま時うもおもづれをとくとそまか  
むおうきとじよせめてのもよ。もよれ夜とくとて

まことに也。おとづれぬれど。おとづれとゆめよ  
乃れといふす。むしりひてことあり事也。神を  
うそとすもあらず。幸也  
万身も爲被り。うちもあれも嫁も。此身は汝也。  
ひとせめても。宿着とも。殊も。内と云。せりて六  
せちて。乃すよもく也。高き人を慕ひよアソんと。とて  
波打盤と枕。て。おとづれとづれて。若丸が。青蘿

王氏性之印

秋日乃事に至りてはもとより人をもむじてかくらむ  
あき風のあをそやう比翁のよちすまくにておひそむ人今  
物もひくわがよそにはまくちゆうりかども

とおもひやうへそ處そこをとどつゆぢづ  
とく。人をもぐもぐむひとのよし。すなはち字也。し等そ  
オふもくおほきよ風かぜきよありか人の氣きふみえ  
けしきやうどやうく風かぜむく風かぜむく風かぜ  
ひびきがちよ物ものをかぶゆれゆれた人のゆく  
をもぐもぐよみえてゆめうけとく風かぜみぬをも  
ゆきりへぞ。四しまをとどまつてもやあららき

志をついたもあよ人の日暮  
乃たまくらと遊ぶ  
小野小町  
下にあそびとへど清興下に冥とてあり。乞う  
沙良たる。人のよき  
追慕うちり又新津

具と云人も居りや。機運勢乃因縁なり。序  
家にようううとうや。いばくとも云ふん

安倍主より書此物

ほのとも神よあまみぬ向むき人と見ゆて、後きうち  
つめども神よなまもとあらぐくあくかはんと見る  
うのたへくふくあくと通あれは、華経五百品  
文よ以て價寶珠鑿其衣裏とほう事と讐喰を  
一々うとされすに下野方あり也

五

こまち

と後きうち海を神よむをたに我させをあても纏つとある  
をろへるれ海ぞ。神よぬまくぬまくひとへりゆ。我  
せらぬ離つとのごとくすれどと也。據巣のむことなり

寛永より古時をばらひのえれ平倉の

苏原とゆき乃翁

おもじてうちあす中に行ふる者れもちへばらうか  
おもじてうちあす中に行ふる者れもちへばらうか  
うはよかねれど也。うつよハカヨシ。うつよ。若狭城  
どくやまとくかくわがとつよ。徒夜よ例をくぬゑ。  
ちよゆもひゆうてと。うつよ。行げれよ。若  
ふもじぶけやまとくと云ふ也。万葉よ。若狭城

とよ

往の江の岸にすれよ。うきや。若狭城。萬葉人あくらん  
すれよ。乃まくみくらなきもの。の。の。の。の。の。の。の。の。  
ちとくへんとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まことにうれちやんとも

廿九日廿二

三

をかへりた

我意もたよる乃がまのわやもきこゆさんとす人等に  
みゆくれのまたとく。おのとせきとあが人の  
あらとせいかうれち様をあらんうだにとせてもり

紀ともばり

あらももかくアヘヌ夜にまどひまくわらぬむすル  
もしの雪丸えのもかくまくやまびよアヘヌとバル  
けりくとくも。かゑよやすどふいもねまうつとせ  
タまねき雪くらくふるあれどもさみゆく人のまわに  
ゆべばほろほりておひよもゆれども。おら  
みをもう。人のはまちくあらめとせ。まあはまタ

ざれ。まきれいの月。まくをだと万葉あよかくまよ  
はくべ。春つ。あきだ。去とくとて。い。え。とそまき  
縁をとくとく。ほくめ。タまくと見てるが。と。お。ま  
とい。うれじらゆきとくい。勝字とお。けと。清て  
くし。又城にさりきりとくと。ぐふと。清てつよ  
と。現すとくい。や。まあは。テ

うもむかくとく月のとむ里のくかくとく天の橋立  
あらむとくむかくとくあらくとく。ふ先を。せきと  
あきてアラと。思ひ。社ふよ。うあくしきあう。權のむ  
おのとくあくも。独れ。我衣を。しらえ。アラ。う  
うれ。まよおのまゆくとくも。ひくねの夜を。お

ふるやうのまことのうきとおの消つてえおうりう  
まくえくらう人のよ。せんじゆんとそよ乃のゆとまく  
あくわせす。まくえくらうてえ。かくわせと  
こちぢり。かくのうきよたくわせとたくで  
とくわせやくはれも。だくしてくもつね  
ほくはくはくよ。まくおのうをねひあくとくせ  
ぬくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
あくわせどくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

とアラシの如き乃紫よもて勝乃弟豈因渦かくど  
也あら、林の葉よ才くわくと始て、もむぎも桂牙

がくし  
宮の内酒ノおもてなし物モノなり  
人の心と遊ハシマぶがくりゆふりよもて  
あおき也

古今類要

萬葉集

三

おもよしの源乃席よみぢりぬれもとほくを我いかむる  
まくらあふれやまくらがりよきととたれど。みどづく  
とまくらわらぬまくら。まくらにはまくら。江河乃あくら  
深とまくらかよ。あくらもうと云。あくらよ。あく  
尾。透とくも也。國史よ難波江よ端て透標とあ  
あくら。透標も也。もくらとまくらとはまくらと

がおれ月紀よぢら

あくまでもうかとおもひてゐるなりありとづき  
人のほきをよくあそぶよろて。おひつ今ちわん  
よひがち乃つゝれうつみゆふ。おうめうらあ  
てかえとせびきのとく、うらきよく、  
の翁也。むとぞ

とくにあらぬ事だらうともおれは思ふ。今とあはれて  
はまことに思ひ出でる。今と違へてゐる物ぢれど世  
間の事、本筋にてつまることもあらず。ちくまなみよ  
うすまばら別乃筋。物の筋ぢやない。物よつてぬよども  
つまらぬ事ぢやない。あらぬ事だらうともおれは思ふ。

あはれもあはれとよもやま人あはめたら  
とひきぬきぬくともあそわせむらむとおりへどもまよわ  
あみえどもくらむらむと。人あはめたらとせ

後人不復

まことにかくはなてよもぎてむきとくふとくらむる  
あまくさくらかく人の身み あらわせんとひばへやう  
あくそゑのれいんとせ物とひ乃くまく

せめてヨリトシハアヒトナリ。サマ放トモ。ナリケンア  
アラウナリ

高キシカニシテヨリ ウキシヒムシタシモテルハナモ  
アヒトジテナキ。内ゆどひも一ぐ。むすりくをち  
たか方のあつやのこうべきと

### 紀葉

まくよみ漏るくハツネシのあらきとえをほ  
やりしとてしのとあじよ。もくろ清よめられど  
うあはざむとく。かくねんもひれあらへ燃へまく

### 野 犬

よもよもかうれてそり漏川を。あらぬまく。たうちう  
けゆよ我あだに漏川を。おもてこわくぬあれあらまく

あれと也。あら泡を浮てぢやまたわなれどゆくぬ  
とく。あまよげのまく。まく行ゆれどゆく。  
常住ときて。どくもとよじとづく  
美須すむかやをくらむ。あすかく。神のひてきく  
よもよもく。あらまく。あらきく。我神のぬまく  
うぬまく

### 了せい法師

もくとくとくとくとく人をアラク。あい。おれ。庵を。おもう。うる  
まく。おれ。みえ。そもく。みく。のぼう。あい。放。放の。もく。うれ  
て。おれ。庵を。きく。あう。と

### 薦葉

ゆうの湯をうせとから夜思ひよ神をもりまほ

いたりよおへたるにやうよ西、びよ神と  
さきへいたるがゆくとせ。す御、のゆくあ  
まくまく。まくまく。まくまく。

津原山

大江千里

ねよひてひよりうきよかよく。被とくわくさん  
まくまく。まくまく。まくまく。

アマノヘタ

アマノヘタ

新しく物やまの北郭へ附をとどかくあくべくらん  
時をひりてくわく。まくまく。まくまく。まくまく  
まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。

まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。

アマノヘタ

三月山頂とあるを郭ひだりぬかだら立とすみや  
我人をもとめくねとたく。時をふくしてつり

九河内行恵

松原乃ちく。附のじく。すくめく。おもむかく。  
物をいも。松原れもれ。附をひく。とく。なれも。我立  
居の定もおひえぬと。

津原山

生れとおはしてひなゆのを。海れ。とく。おはれ  
むの。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

とく

是貞乃みとの家比守令のす  
左ノ幕一

古今類要

蒙古文

おまかせを山と申すもまた、弓の廉よ。我とくめや、独りわらふ  
ちくちくの、物はらひ、桂かみあらわゆるやうりやう。  
とくに、桂かみを人の飽きよと納めり。山も  
害れり

ちゆうじゆ

おまえさへみゆきをさうりむれどもあはれや  
あそぶよるのみくわてさくらん。けりのよし  
ひまくわれてとまきあり。花のれでせんじばく

卷之三

物とやうておのれの如きは  
皆の意の如きれどもいふ。独りおこなふ  
まことに人の如くとたゞそ  
うするやうぢやんせ。とよひてよし  
ひやうひよるまへ。よほどのう事うるべの風情

すみ  
おもひたての事  
あまがとつのあはげをもつて  
人の立くところとぞ  
ばああらへるゝ所とぞ  
うちもととおれの御は、平潤のあせば風  
よきおもて參る。第一第二経索、  
躰顛焉とある

法華經疏

あくまうはる乃はあめのすゑのひのちとくらす  
あくまうはる乃はあめのすゑのひのちとくらす  
あくまうはる乃はあめのすゑのひのちとくらす

在也。後檢定よお換が尋今よ  
脅肉をもつてみまじのまき色をまじわらひ  
とぞあり。ひき精。一トモんあともくは。油屋修勲及  
門外とくら

やまくらゆうじんよほくもれ  
うきよかくはまのくろかく  
おとことくみまく。花のくわ  
ばくくわく。ごめぢやりよへと。人け  
風ひくまくひくまく  
今まくてもくまくとくまく  
あくまくともくまくとくまく  
ほやくともくまくゆく。風のたぐりと

東北  
支那の物事ひととて、  
日本へと  
おもむく

鄂  
呼  
格  
塔  
拉  
烏  
拉  
恩

のよきをあきらめやうなれども  
かくは上をあきらめやうなれども  
きふとまう

之子

وَلِمَنْجَانَةِ مُهَاجِرَةِ

卷之三

あふるゝをかねて。四のまほ  
おひようをくはす。時の方へと、いんとそ  
むとくへがく。あとくもくとく。夜が等よ。あらわ  
萬葉のさやの中山から。行く人をとひきえ  
かよかく。かく。さく。さく。あ  
つまく。さやのか山。中とくとく。今わから。  
あせぬ。仰仲に。おやあや。こくらふき。下野  
あよを。おもむり。時。まよを。おもよ。只  
まよを。おもひ。おもひ。中山と。やせ。まよを。下  
まよを。おもひ。と。おもひ。三京入を。まよを。はん

あまくいきみ中山とあり。又源三位がおひえ、又  
仲良しが下りておもむく。又よだれ毛とや乃  
ゆきのふよ。又引かまくらをうる。又丸潤とよしと  
うやまくわじ集よ

あさひをとて而仲はまほ

自歎ゆ。まわせれどくふれとあらまき。まくはり  
ひよのすのす。まくはりてあらまき。まくはりて  
あまとれどくはまくはりあま。まくはりて  
まくはり。まくはりをまくはり。まくはりて  
まくはり。まくはりて。まくはりて。まくはりて  
まくはり。まくはりて。まくはりて。まくはりて

角のアヒルも  
金魚も山の背の上に  
山を登るやの中山と  
山を登る人かとも  
山を登る人かとも

其後十三  
年  
秋  
九月  
庚辰  
日  
有  
事  
於  
廟  
中  
作  
詩  
以  
記  
之  
其  
詞  
云  
天  
子  
之  
道  
不  
可  
謂  
不  
長  
矣  
其  
事  
不  
可  
謂  
不  
安  
矣  
其  
時  
不  
可  
謂  
不  
危  
矣  
其  
人  
不  
可  
謂  
不  
賢  
矣

道とゆきゆく

卷之三

あはれのうきよのまへ  
かくはくのまへ  
かくはくのまへ

かくまのりよづもつゝやく源よくゆきとみを一増すと  
きり。紅葉のちよせ酒をふゆふゆあゆうてゆめよ  
ゆゑゆゑよほきら

海もまたおれのよろこびよ  
白雲とみゆきと雪のまつも  
紅葉とあかねともうとせ  
山林

用ひては別れを  
ゆきよるのと  
ゆきよるのと

卷之十二

三

うるさくはあらぬ。やがてつむきあがめのあとで  
月夜は静かとよろしくはまくらをひく人をまわん  
つむきは人とも月夜とへや  
うみとくれどおとこ  
うみゆゑをうぐひにとす  
今もみゆゑあり

うるわしきにあたへ  
せかのうきにひそむす  
あひをど。事中のあらゆること  
がくまくあへ。一矢すへよしと人をいふ

旁

はのむるをかくす  
やまとひのきの山に  
まつしのくわいと  
みゆくへゆく

吉清の氣又に傳説庵。ひよそらのまほの月のまほ

御府の事。其の事は、  
あめもとくふぢの事と云ふ  
とてゆる。因ゆ。やまちの草をやまと草と  
よむれど、やまと乃せと云ふと云ふ

まことに月旦(よがん)の如きは、  
あれど之へ  
たゞらの節あつて。見る  
でしかば。いざ物とゆりて。ま  
まの

七  
かとくらむ。かうとくは、  
うとうとくらむ。たれなむ。やうとく  
ゆふとくらむ。いとくらむ。  
寝宿すよ。

卷之三

は  
竹ちくへ西の唐のせ  
嘗てたゞかあむけへもいせ  
れ  
部ふらうを独りてひがみ  
ま  
もやまくわ  
れりくわらひめん  
あらひめん  
おひきねのせ  
ひとじま。はくじ  
とひのゆき  
宿守有  
人  
まねらひめん  
れまめども紙のそも  
人よもよひぬをひねり  
と物めくらす。然るに  
とあるもとをもと人をも

乃角性子

卷之三

卷之三

萬物皆有裂隙  
那是它在曬太陽

卷之三

命をもとよりておこなふ事あつたる  
かくしておまかせしむるにあつてお

物たりとゆきまとがりうたひどあふるおり人  
不あすかう

まことのほらた  
あつめらしまとまともあつふくらは、ばれゑのゆを  
ゆくとやとゆしあがつ、かふくわむれをれば、あこ  
うゆふれんとおりよりゆきとみ我すに寧と  
あよすかう

羽恒

我意を行ふとまくとてまくとと限とがりゆうと  
まくとくとゆくとまくととくとくとくとくとく  
とおりゆうとくとく

まのまをせりうたを堅とあらてまくとせり

まよ一あとちまれ牽牛<sup>え</sup>感<sup>か</sup>女と。あらてたとくに年  
まくれぞ我だうりそめとおもひてまくとくとく

かやぬ

まくわらまくわらとまくみむとくわらとまくと含波<sup>う</sup>  
今さうひゆくとくとあらんとくのう事れ含  
とくうあうとく

まゆ

ゆかのゆとあらてゆまゆゆありぬくうと人をもくえ  
あらんとくじてあらんとくとくゆくよ。がうじと就<sup>す</sup>  
乃先れわば人をもくとくあらんゆくとくとく

あよすかう

とくとく

よし

東山十一  
かくらやもさきみそがわのねと。かくらやもさきみそがわのねと。  
金やひりやなまごめん。じとくわのあいねと。かくらやもさきみそがわのねと。  
かくらやもさきみそがわのねと。かくらやもさきみそがわのねと。

古今和歌集卷第十三

卷之三

やといひのはくちより思ひよ人よ知らひて  
ほのゑのうかみふみまほく

うるをあつて。あはれとまことに月面とおもふにま  
じるよはて。まことに月面とおもふにまことせん。一様序  
だ。あらわすとまことに月面とおもふにまことせん。世俗よそやわれ  
てどひ人のかみかみとそむかみとそむかみとそむかみとそむかみ

トニセ

ありひる乃翁の家はくま女のりとふの女を  
はぐくまれ

アユキ乃翁

ほれしむきふまゆあ源川袖のぬれぬれす。ま  
あがよひぬうきかくく。人とおひるおれお  
あよなみ川のぬれぬれ。袖をくわむてきくわむ  
きとせぬぬぬよ詠とせぬむ

か乃女よくらてきによう

ちりあく乃翁

流とあそ被ひひの源川袖のぬれぬれす。ま  
やま川のあそびなれども袖をくわめらめ。方た  
あわゆとくわゆとくわゆとくわゆとくわゆとくわ  
のなとくわ

豊川

傍人不系

うるをあつて。あはれとまことに月面とおもふにま  
じるよはて。まことに月面とおもふにまことせん。一様序  
だ。あらわすとまことに月面とおもふにまことせん。世俗よそやわれ  
てどひ人のかみかみとそむかみとそむかみとそむかみとそむかみとそむかみとそむかみとそむかみとそ  
あらわすとまことに月面とおもふにまことせん。空あはれとくわ

あくべど立ちむらおも縁をどうあらうと云ふ。主は  
よひへとまかせたるをどうばかへと云ふ。主はたゞ  
とうじと云ゆて、教ふるよりて祠の事ある。主は  
人きうしごひ思ひをたくひしたる。とと世  
よをかへりそしむすと云ふ事と凡そとくぬりや。  
淳民物候よがをゑ乃日よるべのみとよみる。社  
耶よ神あともく瓶よいわくわたりたと。自由より  
ゆくひづれ事也。お御物候乃くのうのまこと  
をよみだらう。いかひたまこ事也。は櫻藻轉か  
將

ちうとつらひ歩みゆく事あつてかくをむかせ  
教うみたは事あらう。かくをむかせ

月教うみえふくじあ神話やうのふよへりあうまで  
二三に満滿ねほあなら。淳民がをゑ乃日  
さむらうふくのあよこあくさのへりがるをく  
佐よゆきてがまく物ゆくみくに  
かす人をあひくまくりさんよまくわむくは  
うよあもぬきれゆくゆきてきくうくらう  
あみぬれほくもとつむりるを我くとひふくのむと  
び教うある人の云持がん丸くすや  
まぬけあらむとほもく。我もとめかくの物  
をくや。あ離とお構え方のをくのまくと云ふ  
き。またももそよがくとくくへたらう。あらじまくは  
あらぢまく

ならひくのね居

勢乃神ふきりあきの神うりもあきてあまそひち増り  
あまぞまよ繁すきりぬ乃神うりも。人よりてゆつる  
ぐねまきれとせおのまよ繁すきりぬといふもあた  
いもひどもがのづへあゆ。ありてゆうきは。体物よ  
あもでめまきそとみ。あきの神ハぬは神うり

小野小町

カヘおのなに御方とくらと知ひあれそ巡行のあしを參  
マハとくらあむなに男乃我方とくらめーとを思  
えど。べきやうであまのまくらゆくあつとみきみふくせ  
てよひ。まくらゆくと。男乃男にだくらゆく。見  
まう。男乃我方とくらゆくと。あくとくくね也。御方と

うふと。御方とうふやくとあくねくと云

源宗干翁居

あくねとあくじゆるとまの日のまくらやくとくとく  
あくじあくじてのまくら。あぐ人をばくと  
かくとくとく

こよ乃くみゆ

玉盤のまくらとみく別うり曉とくらうとくわゆ  
人のつれあくらーとく。あくとこなうりうれいもれと  
なくとく。たうりうき程とくらゆ。だ服税。女のれと  
玉盤のまくらとく。ゆふふ。まくら月さあくらもく  
もつれあくみくとく。うれい。曉とくらくわゆとく  
とく。あくとまくらとく。うけよとく

は御つて記を取るが如く。かくして行  
かふ。され程乃歎ひてよと出でん。せ乃とひてお  
ゆうべーと也。一程所後。後多の羽院より室を離り  
車入れとへ代集乃中よ面白と歎き。どうもあ  
いばれそと勅問あり。一ノバ。主の内つゝなくの事。我  
車人より向よやさかと也。何やくんよに御する  
と清流をと也。又今集秀歎十首の

三一九

左京院方

主の内すとまく。流されうみての事を喜うるを  
ゆきどづく。あくまのうきて。あくまのう  
レ清小川の風乃主の事。あが。うしれやうたんびを

るをいわ

後人不和

かくて。より風よが。流されやき。たまはまの事。主の  
をとく。風の時をたゞ。うしれやうたんびを  
あくまのう。人をあして。そとまく。うきて。まごのう  
まごよが。まちぬき。うきて。うきて。まごとく。うきて  
とりまく

あみゆ

陰奥。ありとが。まく。かね。おとが。うくら  
みちよく。ふとう。かねのまこと。うが。まく。のたう。  
くが。まく。とく

みくわ。ありとが。

あやかしてまつりをす。乃の圓月はてやましわやまくよ  
う。うきよてもやかなむらのまへに。あらびくわもる  
主のやまくはく。立圓月をうるでやむき。もあ  
うきよて。あやかしてまつりをす。あらびくわもる  
とあらびくわもると云ふ。あらびくわもるやまくはく。迷宮也

人をもててかくはんせんの事。かくはんせんの事。かくはんせんの事。  
人をもててかくはんせんの事。かくはんせんの事。かくはんせんの事。  
人をもててかくはんせんの事。かくはんせんの事。かくはんせんの事。  
人をもててかくはんせんの事。かくはんせんの事。かくはんせんの事。  
人をもててかくはんせんの事。かくはんせんの事。かくはんせんの事。

蒙古人也

かくはんのうへてあらげくわざひはまぐり人のふくら  
ぬせよとあらうとえをうながすと  
とせりへよひゆよちりこつまくゆきいろがま  
人よくねとあらうとくにんを云ふと  
あくまくかうじんのよゑをかうじく物  
きる人よあらうとくにんを云ふと  
あくまくかうじんのよゑをかうじく物  
ひんのよゑをかうじんとくにんを云ふと  
えいじくよゑをかうじんとくにんを  
あらうとあらうとくにんを

かの事とまつておもひとひきとえありておも  
ふうりておみくにあらうる  
東乃みゑはなむのすい文徳后太政大臣御房云の沛  
女ちうり。清和母后也。おまよをかんうへもおまよ后也。モヤ  
陽成御位よつまご給へど。祖母よちうりもゆまじて太室  
太后とや。西對ハ除殿のゑ乃對也。一系后は對也  
とくとく。そめとれとへいとく。二系后もくもすたり  
もくもくの中娘也。又おまよ乃傍善祐寧也。とく。寛  
平八事の后と廢せられ。善祐も伴臣也。配流せらる  
れ也。伊勢はあらわくわざりとあると。ば何也。う  
だ乃くわざりと費そくさるもとくら

## おうちノノ内物也

人多れぬがよひち乃開也。よひく。とおおねまく  
ひく。きぬり。ひちち。とく。とく。あれど開も。無  
よおもねじとく也

歌

歌

せかふとさき時をさゝのひづら月のひづら月とあれ  
人よきのづれど。あら。さふひづれど月乃生くがもひ  
くもひづれど月とあれど

徒人ふれ

立くてお尋ふておひそむ。お役乃ゆく。存も。まく。とあく。あ  
ねく。おはく。とて。たまく。おこく。おまき。おれど。ゆく。存  
きのまく。おとおとおれど也

徒人ふれ

おのれもおれもからうまうまとおもふことをゆく物  
あきらめとあきらめとあくまでもあくまど。  
も行かうといひあくまよ。かくゆう物  
とくや。独りあがむ。うかむともかくおきえ。きや  
あきらめとくや。おわゆう事。物めぐ人のやうひや  
けどとくや。行かうともたゞ。源氏はおのれの  
神とつかうふや程もくぬとりへ。新古今より  
きくみくらむとくや。おもひのまのまのま

凡河内初恵

ちうとうひそむておまくらふ人の秋の秋をも  
おのれをかじかくとくよもくい。むくもくくわく  
きて。あふんよくうて。おもあうとなくくわく

とありとえ。源氏  
を假り方とて。あや下に行人のちうくと  
ひ人へくとて。じしあ集乃ハ達て。じう

後人

兼見かくとゆ行をきみよかくねだうを鳴き  
夜のひづかよあきゆあも。あひる夜とくのうをかく  
とせ。曉と兼見とも。櫛目ともして。門をく  
すすみのまくめ。ひりゆりそのやゑと云。か  
ほくとく。朝を略くとほくと云。かくと  
ゆくとくと

藤原國經翁

ゆふとくいきみのゆくとほくと云。かくとくとくとくとく

夜乃雨れとて今まゆもとおりふんのはくくうう  
ごろふのいじもなうひぬがふ餘波乃御くく煙  
きくせ。万葉よとる波りとくらわびづらぬをくら  
もむづくねとくら

寛平の洋時キタヒルミの再令也

アユモ乃物也

ゆかてゆかたはまくわれて雨を漏りゆうそやうに  
妻のあくとてゆかたはまくわらひ。あくたれ  
あも漏りゆうそやく神ぬもと也。若保津と云。漏らう  
あくたれまくわらひ。向くうかとことゑをさせ  
めとやまの田ノ稿のうだれてゆきとまれ村のうえ  
は集雜部のす山田ひゆふやせてシテ

野 らと

寵 一復うけ  
てを用く

あめのあと御み我をえむうちよひのう  
あやれ衣の餘波御 まふ。多ううぢよひのう  
をうと。多ううぢよひのうと。やくあおむく也

後人不和

ゆかてゆかたはまくわらひ。あくとてゆ  
ほくとてゆかたはまくわらひ。あくとてゆ  
あくとてゆかたはまくわらひ。あくとてゆ  
をうと。多ううぢよひのうと。やくあおむく也  
あくとてゆかたはまくわらひ。あくとてゆ  
我をすくわらひ。人のやうに往よ。あくとてゆ  
をうと。多ううぢよひのうと。やくあおむく也

もがきまくらをあらわすらうとおもえ渡て身を  
と羽衣みてかみよむあうかともあうさう一ふ。いま  
おもひあふとまえへとくらうとまくわどおきあ  
なう。じまねてまことやうよをうり面ゆ。

人よまとあいゆふよみくはうにまされ  
ちうりひく乃翁

ねのくわいのまことくらむとくらむのそらやまのふと成ゆる  
人よほのふあひくらぐゆめんこくもまのくねどあぬ  
鏡波とまくらうてり。あくとのまつらやくゆうとくら  
まくらむよ。まくらやくゆうとくらうて成ゆる通  
葉平鶴臣乃翁物のあよでうりありくらは參  
えたりきる人よいとみをふあひてスのあいた

よんやくまくならてさひおううとおひくふおれ  
きくまくらりおこすもあくらう

伊勢よけ事くらくくみえくら。みえくらと文徳乃  
津女清かの山林也。自觀えまよおもよあらまよ  
日十八日よ退院。津乃うちめふ正統。ちうりひく翁  
西よ寄るとまうけ経よ。まく翁即尚これすり  
徒人トシモ

あやう我行多くわくとるまううとれねてう覚て、  
本さやありはる。あやゆくさんとくづ。まよだくね  
てれ事うきて乃事うとくあふくとく。あや  
我やゆきさんとくとく。乃被なり。あもりくは  
あづり。よし乃二のとのへり

古今機十三

卷之三

蒙古の文化

かきくす。筆あはとひよに筆とへ世人をあよ  
う。筆くそとあらわ乃聞よア。どもて。筆もと  
筆もとえをむき。うふも。せの人にえりよと筆也  
よいか。いふめ。かと筆。秋官ふこよひありてさ  
あよと筆ん也。一後せんふと筆。後筆あは  
乃後筆。筆をうち。筆の人にえりよと筆。せ  
人の筆と筆。うふの筆。筆をうち。筆の筆  
筆あよと筆。筆の筆。筆をうち。筆の筆。筆の筆  
筆あよと筆。筆の筆。筆をうち。筆の筆。筆の筆

野

人不

卷之三

かのう、わいとくは  
まよふしゆく。  
おまえの  
まよ

アラタニテシマス

たまがうちとせぬ網引とあこととのうあきのひ  
とあ あわき網引とあら  
お角せぬはあくわいふせんとうをアシキアシ  
トモウ河乃むれ本のとくやう。わくわくひふ  
とんとんじく、我さあひぐそあくうそとせりつま  
ーとせり、城やひつ、せんじゆるに事と教きた  
やう。ほまもみよつちよももくとせりくばれすも  
あら

ね枝まであくわいふせんとう我ねあぬ  
お角しゆ、わくわくひつ教りて西よ是しき教すもあら  
完本に古今集あす十そ乃モ一やう

トモウ河乃のわざくとも瀧のまつわゆくとせり

トモウ河乃のわざくとも瀧のまつわゆくとせり  
お角しゆとおりよとせり

トモウ河乃のわざくとも瀧のまつわゆくとせり  
お角しゆとおりよとせり

トモウ河乃のわざくとも瀧のまつわゆくとせり  
お角しゆとおりよとせり

トモウ河乃のわざくとも瀧のまつわゆくとせり  
お角しゆとおりよとせり

あらうとおもひたまへに。今を  
わざくよほめじてゐる。わが身  
もさういふ事はなかつた。内に  
えあつて、心の内にかくはんと  
まう

蒙古文

を喜びやあらへうむと却て下ゆ。海乃もまたやれど  
人よゑらまつは。海乃とくふを。因人とあらわれて立  
たまえ。海乃とくふ。人の立まつ事のうどれ  
一もと。ひきとくもと。あくと。とも下級  
もと。うづまと。下級。下級の腰と云也。上級とくふ  
もと。うづまと。下級。下級の腰と云也。上級とくふ

了當衣乃腰なり。人よをと下細くさう  
紫乃毛りや細のきよわとおもひやせんをすとあみ  
にゆよおとあもも細とのくよておもひやせんをすとあみ  
絆のをとえ。うハ裳の小結也

持乃まゝにたゞ思ひよあひ  
お、おかめりませ

後人考之

あれ源よ神乃かおやうじゆくもと  
あらまゆせ女の作ふもとて有衣もとく一間  
きぞ人のもとみやうにむくもとく

卷之三

おまつりあめのまほんへんかとくみがい  
うつゆきをもとくへゆふるよんへんかとく  
おがまひきとゆく乃無所へんくらんの育て  
限りきとゆくふとん着きとまよん金とく  
要ひとくと。人のやまとゆくふとくと  
あひて。おひ乃まふようとひくふとくと  
せくとく

清人集

人をおりてゐるよ。まほよはとくつかうへとも。だよひく  
かう事へいたまへとこひくあうゆへ  
捷人（ハヤヒト）  
も  
ひとも人めはてんぐのむすを河へきえへう海へ  
ちひくはうどく人めとはえあふが。あらとくゑや  
きどくえやぬうづちうとく人めはくわくと惺よ  
うせ。提乃あくじを河乃よくわくよくぬす  
くもくあうがれとくわくとくわくとくわく  
きおよハ河とくわくとくわく  
能つまくやうとたるも人めはくのせまことひん  
瀬川乃みのとくわくとくわくとくわくとくわく  
一  
人かうれをくとくわくとくわくとくわくとくわく

寛平乃津時三月のま乃平合れあ

船泊よりそくうとおのちにさしておるよ

んうと母ひかづはくよおもむとある、  
まくおとせ。陽流の下にさして、おびきよ

野と

みほ

みよ池よりむ島のわたらす底はよとよも  
池乃よもや。ばらく底にさすとめいへよもくに  
なよせ。れをよじてかづかせばらをたらしつきが  
とゆる。車也

集の森よもく初あらわとよもよもよもよ  
きのあよもくものめくとよもよもよもよも

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
によよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

後人よよよ

山よよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
あよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

後人よよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

平員文

あらぬあらぬとすくや。座溝を溢てよしてとまふるべ  
いのそこと活く人のどうどありあつとあらざるともいと  
あづくてせよちきりとまふんとらすとと也

## 左列

あらぬこきねと若しれは終てみるむ令ともあ  
トにあわせどく御みうぶのとれあえたうごとに隣  
てひひきふん人ひとのそとせじれ然をまとら  
お経乃終てこられまとうふゝせあり

我意と思ひてさかのひもちとまわきよあねへ  
うす知らひと思ひ難くもむべ思ひうひてあればゆゑ  
それのとくきよ出づとくせ。山もちぞれハ世俗は數  
博と云草す也。实乃えあくと物から攀がうきの附山葛

よもすうるよ。一説牡丹と山もちとふと云。左乃ち  
ききれなれどもくへあうともりづく

## 後人

大すいあくや。漆あきをまぐる無どうとすくあすくち一  
人のほまなきてアキ事れどくをまく。十乃翁七ハ  
ぞうりき多ふもく仰まく。多數もあくつむかんと  
ばくによせて。やくもひとで漆こだまくと。一説油  
のほくりきアキ事れどく。みもとと清めま  
けよ言ておやうだとうや。完かにえじくまく  
多ふもみよとあくおたんせを油色とふくうのすく  
くとよる。何とやまわ事れどく。一説油  
きだよみわめをくまく。漆へあざきまくとぼり

とおひしてゆりと。が服後櫻は  
何せんよる。されどまめとらひく沖つわをとうへに  
こゝと云被をアガリて。満をあふとやう。こ  
とうりかきして。ゆり出。そゆりそり。さわじうち  
ぬ袖も。アドトキ事。ほり年うされ。お満をど  
とてゆりさんや。但差差ふ十二

あもあひて。人を。おまう流毛とを。まえ。ハ知人毛  
あれも満の毛と。はやえたり。清浦船。奥義よ。け  
平と。ちゆ。たゞ。を。取。か。以。は。人。皆。う。べ。た。と  
あきと。おれ。一。程。済。後。我。名。も。み。る。と。い。ま。名。も。な。ふ  
乃。ぐ。じ。と。ま。方。義。よ。満。演。と。ま。て。ア。ト。ト。ト。ト。

### 平圓文

れりえも。人を。ちよと。け。ま。あ。と。ま。く。一。は。う。か。  
こ。う。毛。と。れ。り。て。い。あ。れ。と。も。な。ま。と。な。ま。と。せ。ま。い。ふ。  
れ。り。毛。と。も。く。は。う。と。も。人。よ。わ。く。つ。と。あ。う。り。  
え。と。れ。時。と。お。経。て。ゆ。る。事。を。く。く。と。も。お。も。と。せ。ぬ  
と。れ。れ。乃。も。く。ま。せ。ぬ

### 漢人不痴

風を。流。う。が。れ。ね。や。ね。よ。あ。く。れ。て。も。ま。ま。く。せ  
ば。事。を。あ。れ。人の。い。く。様。か。人。れ。り。や。う。  
ち。う。ん。打。度。の。ね。乃。と。く。様。よ。あ。う。つ。れ。て。遊。ゆ。く。と。  
池。よ。も。し。ふ。と。か。魚。あ。と。漁。く。く。と。す。れ。と。あ。く。れ。よ。う。  
池。よ。も。し。ふ。と。か。魚。あ。と。漁。く。く。と。す。れ。と。あ。く。れ。よ。う。  
ら。う。に。と。く。我。立。ま。あ。と。あ。と。そ。り。う。

まことにあらぬもうりをばすと。めぐらの御きのこと  
あまきひをひ乃經よそあれり。我乃立ひたる  
乃御つ努力乃事れど。おじいへくゆゆうと也  
村のあらす一城をしまよ事やうあくもと。あら  
うがふ乃あらすと。ひまくよ事やうあくもと  
なれとよとよま。まくせてももくに  
ことくあくまつねやれど。くふ乃きもくとよつて  
事やうかくとよ。事やうきゆよとよ  
あらすり難むをよまくあくまつね。くふ乃きもくとよ  
あるかよ。我乃立ひあくまつね。くふ乃きもくとよ  
みちあらうがとくよ。人のゆとあつひゆくとよ。こど  
く名めうわされとつまと。野山もやまと

